

目次

第Ⅰ部 中世村落史研究の歩みと課題……………5

はじめに／戦中以前の  
中世村落史研究／戦後の  
中世前期村落と荘園制論／村落と在地領主・武士団／室町期の  
荘園と地域社会／中世後期の「村」論／収録論文の位置と今後の課題／参考文献

第Ⅱ部 荘園と地域社会

撰関期荘園の在地状況と気候変動……………高木徳郎…67

中世初期の地域社会―東寺領伊勢国大國荘とその周辺……………前田 徹…93

中世の地方寺院と地域―鎌倉・南北朝期の撰津国勝尾寺と周辺地域……………中村直人…125

中世における堤防と河川敷の景観……………小橋勇介…149

### 第Ⅲ部 地域の中の在地領主

莊園制成立期の社会編成と「地域」形成―在地・近隣の「地域」―	守田逸人	183
在地領主支配下における中世村落―肥後国神蔵荘の村落―	廣田浩治	213
中世後期における村落構造の変質―山城国上久世荘の場合―	川端泰幸	237

### 第Ⅳ部 村落の構造と多様性

中世前期村落の共同体的契機について	前原茂雄	269
中世「村」表記の性格と多様性―紀伊国荒川荘を事例に―	坂本亮太	303
惣有田考―紀伊国相賀荘柏原村を事例として―	小倉英樹	331
惣村の社会と莊園村落―近江国奥嶋荘・津田荘にみる各「惣庄」と村々―	若林陵一	355

あとがき 373

執筆者一覧 376

## はじめに

かつて、日本中世の荘園や村落を研究することが、そのまま日本の中世史あるいは日本における封建制を研究することと同義であった時代があった。つまり日本の中世社会の特質を理解するためには、荘園・村落の理解が不可欠と考えられていたのである。しかし、一九八〇年代に入る頃から、問題関心や研究対象、史料や方法論の多様化が急速に進み、二十一世紀に入ってから十五年以上が経過した現在、中世荘園史・村落史研究は、数ある日本中世史の研究分野のごく一部を構成するに過ぎなくなってしまった。

そうした研究状況の中で、今、改めて荘園史・村落史を研究する意義とは何だろうか。その解答は様々にあり得るであろうが、この問い自体は、「村落とは一体何か」という問いとどこかで繋がっていると思われる。

二〇一四年五月、ある意味でショッキングなレポートが公表された。地域振興などを担う総務大臣や岩手県知事を務めたこともある増田寛也氏が座長を務める日本創成会議人口減少問題検討分科会が発表した、「全国に約一八〇〇ある自治体のうち約半数にあたる八九六自治体が、二〇四〇年までに消滅する可能性がある」という趣旨のレポートで、その該当自治体の実名も同時に公表されたため、大きな反響を呼んだことは記憶に新しい。その是非については賛否があり、現在ではその批判・反論も多く公にされているが、地方からの若年女性の流出が、従来予想されていたよりも早いスピードで進んでいく可能性があることを強く印象づけた。

一方、より深刻な波紋を投げかけているのが、一九九一年に社会学者の大野晃氏が提唱した「限界集落」論である。過疎化や少子化が進んだことにより、集落の人口の五〇パーセント以上を六五歳以上の高齢者が占め、共同体として

の機能維持が困難になっている集落が中山間地を中心に多く存在しているという議論である。国土交通省が二〇〇六年に行った調査では、この定義に当てはまる集落は全国に約八〇〇〇あり、このうち近い将来に消滅する可能性のある集落は約二六〇〇あるという。この議論にも批判は少なくないが、この問題がより深刻なのは、人口の偏在と中山間地における人間活動の不活発化により、土砂災害の多発など、国土の文字通りの崩壊が現実の問題として起こってきている点である。

日本中世史の研究の中で荘園・村落史研究の位置づけが低下してきたことも、研究の多様化と細分化がその要因の一つにあるとは言え、こうしたいわゆる「地方の衰退」、「地域の活力の低下」という現代社会が抱える問題と無関係ではなからう。しかし、上述したような議論は、そのそれぞれが現代社会が抱える危機とそれに対する警鐘として提起されたものである一方、歴史学的には、人間が社会的な生活を営んでいく上で形成する様々なレベルでの共同組織や共同体なるもの、さらにはその根底にある人と人との結びつきやつながり、より情緒的に表現するとすれば「絆」などと呼ばれるものが、決して自明のものではなく、歴史的に形成されてきたものであるという議論として受け止めることが可能である。

村落とは何か——。そうした問いに対し、私たちの研究会では当面それを、人々が社会的な生活を営んでいく上で形成する結びつきの一形態で、第一義的には生産のための空間や設備、信仰や祭祀を共有し、必要に応じて自らの要望や願望を実現するために政治的にも行動する社会集団と定義した。そしてそれは時代や地域によって差違を有しつつ変容・変化する。したがって、そのような人々の結びつきが、いついかなる形で形成され、時代と不可分の特質を帯びて変容していったかを跡づけることは、変貌する現代の集落、変容する現代の社会、それを行政的に線引きした自治体のあり方やそれらの淵源、そしてそれらの今後の行方を理解し、判断する上で不可欠の作業であると考えられる。近年、中世村落や荘園制を研究する研究者の数が少なくなってきたという声をよく耳にするが、中世の村落

や荘園制を研究することの現代的意義は、以上のような理由から、決して小さくない。

本書は、そのような意識のもと、関西地域を中心に約十三年にわたって研究会活動が続けてきたメンバーが、自らが考える最新の問題関心に沿って行った研究の成果を世に問うために刊行するものである。ただし、単に個々人の個別論文を集成するだけでは、出版事情が厳しい中、研究会として論文集を刊行する意味がないのではないかとこのころから、研究会の共同研究の成果として、研究史に対する認識をメンバーで共有するため、また、これから村落史の研究を志そうとする若い方たちにもその研究の指針として頂くため、中世村落に関する戦前以来の研究史をメンバーの共同討議の上で共同執筆することにした。この討議と執筆に約二年の時間をかけたこと、そしてその成果を以下のような形で収録できたことが、本書刊行の最大の意義であり、本書の第一の特徴と自負している。

以下、この第一部では、日本の中世村落史研究の大きな潮流を、「戦中以前の中世村落史研究」、「戦後の中世前期村落と荘園制論」、「村落と在地領主・武士団」、「室町期の荘園と地域社会」、「中世後期の『村』論」の各節に分けて概観した後、本書に収録した諸論文の概要と研究史上の位置づけ、さらには今後の課題について簡単に述べている。なお、各節の末尾に（ ）に入れて執筆者名を明記したが、歴史用語の用字については各執筆者の選択に委ねた。とくに、荘園・庄園のいずれを用いるかについては、研究会内でも何度か議論したが、最終的に統一することができなかったことを付記しておく。

(高木徳郎)

## 一 戦中以前の中世村落史研究

### 1 通史的叙述における「民」《発見》の時代

戦前・戦中までの村落研究史を概観する場合、清水三男による一連の業績を、そのもつとも優れた到達点と考える